

道具は、生きて いる。  
手をかけて使 い続 ける。

般若 剛 「漆器・彫刻」

Hannya Takeshi



引き出しにしまってあるノミの数々。形状、サイズなどで分類され、きれいに納められている。  
職人が使う本格的なノミは、鍛冶屋が鉄を鍛えて作るため、一般的な彫刻刀に比べて高価であるという。



すべてに道具を優先して

右手に強く握られたノミが、鯉のうろこを彫っていく。少し進むと、刃の大さやが違うノミに持ち替える。

「この鯉の盆で40本は使う。作品によつて、使うノミが違ってくるんです」

「この鯉の盆で40本は使う。作品によつて、使うノミが違ってくるんです」

「この鯉の盆で40本は使う。作品によつて、使うノミが違ってくるんです」

「この鯉の盆で40本は使う。作品によつて、使うノミが違ってくるんです」

「この鯉の盆で40本は使う。作品によつて、使うノミが違てくれるんです」

切れ味は常に鋭く

「それから、儲けたお金の大半は道具に化けた。生活も苦しかったけど、2本でも3本でもと、揃えていったんです」

400本は技と意欲の証明

独立した般若さんは、漆器彫刻だけでなく、新しい仕事にも挑戦した。欄間や美術銅器の木型なども手がけた。

「どれも独学で学んだ。仕事は、ひとつひとつが勉強。自分の体に残っている財産ですからね」

やらなければ、それまでだから、と般若さんは語る。

展示会への出品も意欲的に取り組んだ。これまで、全国漆器展通産大臣賞など数々の賞を受賞している。

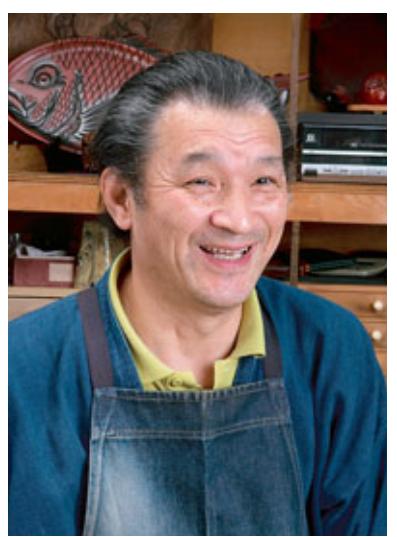
「若い時は、どんどんアイデアが出た。作りきれないほどね。塗師屋さんが難しいと言つて塗つてくれないと、塗りも自分で学んで塗つたんです」

「私が大きいノミを持っているので、兄もよく借りに来ましたよ。こんなのは、1年に何回も使わないからね」

400本は、般若さんの挑戦の歴史であり、ものをつくる意欲の強さを物語る数字である。

父と兄の道具を受け継ぐ

現在、般若さんの手元にあるノミは、約600本。平成9年に父が、17年に兄が亡くなり、二人が使っていたノミ200本を受け継いだ。



般若 剛 はんにゃたけし

昭和17年 高岡市生まれ(本名 武)  
昭和37年 父善用に師事  
昭和39年 富山県デザインスクール修了  
昭和43年 独立し「般若剛木彫工芸所」設立  
昭和55年 高岡市伝統工芸産業優秀技術者表彰  
昭和59年 全国漆器展 通産大臣賞受賞  
平成2年 伝統工芸士認定 加飾部門 彫刻  
平成15年 高岡市伝統工芸産業技術保持者 指定 彫刻部門  
平成19年 伝統工芸品産業功労者 表彰



(右) 鯉の盆を彫る般若さん。  
(左) 般若さんの作品「親子獅子」



(右上・中)  
曲げノミなど特殊なノミも多く揃えている。

(右下)  
ノミの形、角度に合わせいろいろある研ぎ石。

(左)  
おろす前のノミ。右3本が三角ノミ。続いて丸ノミ、平ノミ2本、左は小刀。

